

八木重吉——その一側面

佐藤泰正

「日本の基督に關する詩は、八木重吉の詩をもつて私は最高としたい」(草野心平)、あるいはまた、「われわれがなによりも感動しなくてはならないことは、八木氏において初めて、信仰告白が日本の詩といわず、日本の文学的言葉となつたということである」(井上良雄)——これらの詩壇またはキリスト教界からの発言を引くまでもなく、今日、八木重吉を目して、「日本における最初のすぐれたキリスト教詩人」(鈴木俊郎)とする評価は、ほぼ定まつているようである。

彼の最初の評伝「八木重吉——詩と生活と信仰」(關茂著)が、キリスト教界より生れ出たことが示すごとく、今日彼の詩は詩壇に於てよりも、キリスト教界に於て論ぜられること多く、詩美の玩賞、批判そのものよりも、むしろ信仰のあかしとして語られることが多い。このことは一面、八木が詩いよいよ拙くあれ／＼キリストの榮日毎に大きくあれ／＼とうたつた彼にとつて、むしろ瞑すべきことかも知れぬが、然し、「概念的で低俗な理屈と平板な感情にすぎ」(草野)ざるものを以て、信仰詩と稱する凡百の存在に對して、彼の詩が純乎たる文学作品である以上、その信仰的、あるいは精神的側面をぬ

き出す抽出作用、いわば「思想的還元」を以て終るものであつてはなるまい。たとえば、ここに周知の一句がある。

草をむしれば

あたりがかるくなつてくる

わたしが

草をむしつていただけになつてくる

「詩はここにあるのだ、どんな大なる詩にしろ、新奇な詩にしろ、この一点をはずれたものはこけおどしに過ぎない」とは、この詩を評した高村光太郎の言葉である。まさしく真に詩といふべきものが、ここにある、一見淡々しく、日常身辺の些事を、なんの工夫もなくとりあげたもののようにみえる彼の詩が、我々の心に、かくも深くふれるのは何故か。

うたがいのもなく、ここには日常の重さを脱して自在な言葉を手にする作者の成熟が、詩語に對する詩人の豊かな成熟がみられる。彼の独自の詩風が、暮鳥晩年の詩境——「雲」の時代の影響裡にあることは、容易によみとれる處である。事実、彼の詩風の確立は、最初の詩集「秋の曠」が出版される前年、大正十三年の半ば頃——仔

細にみるならば、たとえば「定本八木重吉詩集」に収められた同年六月十八日編とある「鞠とぶりきの独楽」と題する一連の作あたりが、ひとつの転機かとほぼ推量できる。

これは「雲」の詩篇が、十二年九月より十四年一月にかけて諸誌に発表され、詩集「雲」が暮鳥没後一ヶ月余、十四年一月に刊行されていることを思えば、重吉の晩年の詩境開眼とその深まりとが、ほぼ暮鳥の「雲」の時代と並行していることがわかる。

詩人山村暮鳥が、幾度かの詩風の曲折を経て、晩年の「雲」の境地に行きついたことは、周知の通りである。あの独自の「聖三陵玻璃」(大正西年十二月)の世界から「風は草木にささやいた」(大正七年十一月)のような人道主義的詩風に傾き、さらに「雲」の世界へと赴く暮鳥の変転は、それ自身、やや性急ながら、近代日本詩の道行を一身に具現してみせたものと言えよう。これを詩の成熟とみるか、退歩とみるかは別として、その晩年の境地が「詩と人との一致」「詩と人間性とのみごとな統一融合」(山室静)であることは、疑いもない。重吉は、この暮鳥の行きついた処から出発し、然も暮鳥とは逆に、以後その詩風は一貫して変らず、「この一点」に熟していったとみることができ。勿論仔細にみるならば、たとえば

△そこらに／みそさざいのやうな／口笛をふくものが／かくれてゐるよ／なあんだ／あんな遠くの桑畑に／なんだか、ちらり／見えたりかくれたりしてゐるんだ▽ 1

△ちいさい童が／むこうをむいてとんでゆく／たもとをひろげ

て、かけてゆく／みていたらば／わくわくと、たまらなくなつてきた▽ 2

△木蓮の花が／ぼたりとおちた／まあ／なんとといふ／明るい大きな音だつたらう／さようなら／さようなら▽ 3

△柿の葉は、うれしい／死んでもいいといつてふうな／みずからを無みする／そのようすがいい▽ 4

1・3は暮鳥、2・4は重吉であるが、暮鳥には曲折の果ての表現に対する放担さや、ある種の饒舌があり、重吉には、一箇の作品への凝縮と抑制への志向がみられる。また「雲」にみる「生命讚美の日本主義」(山室)ともいうべきものの残映、文人趣味的、俳諧的低徊、自然詩人的な姿勢——それらを一切包みこんでの「東洋的心境」ともいうべきもの、これらは、重吉とは凡そ無縁なものであつたと言える。然もなお両者を深くつなぐものは、詩に対する根柢的な態度——「詩と人との一致」という姿勢であろう。

「雲」の序に言う「そのみが芸術をして真に芸術たらしめる」その「何か」、「芸術における気稟」の有無を制する、その何かを求めつつ、その途上に暮鳥は仆れた。重吉もまた、その「何か」を求めたが、然しそれは「気稟」というごときものとは、少しく意味合いの異なるものようである。この違いは微妙で、然し深い。

彼は、その自らの目指す詩風については、語ることを極めてすくなかつたが、ある友人への書簡中、「私は自分の究極においては、子供のやうな詩をのぞんでゐる。だがそれは五十を越してからのことであらう」という意味のことを語つたことがあつたという。(北田昌一

「ひそやかな経験」——山雅房版「八木重吉詩集」添付の「八木重吉研究」所収

たしかに彼のすぐれた作品の多くには、あの幼な心のはずみか、生々とした流露がみられる。前述の「嘲とぶり、きの独楽」の前書にも「これ等は童謡ではない。むねふるえる日の全もてうたえる大人の詩である。まことの童謡のせかいにすむものは、こどもか、神さまかである」と記しているが、このふたつの言葉をつなぐならば、彼の詩風を支えるなにかを、感得することができよう。「こども」や「神さま」という完壁さからはみ出た大人の世界で、なお幼児の如き真率さ、純一さを以て感受し、驚こうとする——この彼の詩を目して「幼児期退行性」（本郷隆）を指摘する説もあることは、一見肯ける処であるが、肝腎なことは、それが過去へのたんなる退行でなく、この只今の一瞬、一時を生かされてあることへの驚きと目覚め——言わば過去と未来の中間時の深い緊張感に支えられていることが、見逃されてはなるまい。まことに「むねふるえる日の全」が、そこに賭けられている。

ここで、究極においては「子供のやうな詩を」という彼の求心的志向は、もはや詩法の世界だけでなく、彼の深い求道的姿勢に、そのまま分ちがたく結びつけられる。

基督になぜぐんぐん惹かれるか

基督自身の気持が貫けているからだ

○
からだが悪いままに春になってしまった
だが基督についての疑いはまったく消え

八木重吉——その一側面

何か寄りつくと

すぐ手のうちの火をなげつけるような

するどい気持がある

これらの信仰詩については、もはや説明する必要はあるまい。彼の張りつめた一筋の求道心につらぬかれた詩篇については、すでに多くの評家によって語りつくされている。またこれこそが、彼の詩篇をつらぬく骨格であることは言うまでもない。たしかに、ここには井上良雄氏の言われる如く「信仰告白の」「日本の文学的言葉」への見事な肉化がある。然し、ここで特に注目すべきは、それが単に、告白の「文学的言葉」への肉化に止らず、「日本の」「文学的言葉」の肉化でありえたという、そのことである。

井上氏の言葉には、世上一般にみるキリスト教詩といわれるものの多くがまとう西欧的粉飾、あるいは借着的な根差しの浅さへの批判がこめられていることは言うまでもないが、然し、この「日本の」云々の言葉は、恐らく評者自身の意識をさえ超えた、深い意味を蔵しているように思われる。たとえばそれは暮鳥にもつながることであるが、彼がああ朗太郎の「月に吠える」（大正六年 月）に先立つこと一年余、「聖三陵玻璃」に於てなしとげた抒情の変革、朗太郎をして日本詩における未来派の誕生と嘆せしめた、その特異な詩風から中期の人道主義的世界を経、晩年の「雲」を中心とする詩風に傾いていった経緯は、彼の思想上、生活上の破綻、その極限より極限へ走りがちな生得の気質、更には若年の表現意識への昂ぶりから、やがて生活意識への深まりなど、さまざまの原因が考えられ

るが、そこには、やはり日本の近代詩をつらぬくひとつの要因が、大きくはたらいっているように思われる。その要因とは何か、ここで近代詩の内包する一、二の問題を瞥見することもまた、無駄ではあるまい。

二

「近代の抒情詩、概ね皆感覺に偏重し、イマヂズムに走り、或は理智の意匠的構成に耽つて、詩的情熱の單一な原質的表現を忘れてゐる。却つてこの種の詩は、今日の批判で素朴なものに考へられ、詩の原始形態の部に籠躡づけられてゐる。しかしながら思ふに多彩の極致は素材であり、そしてあらゆる進化した技巧の極地は、無技巧の自然的單一に帰するのである」

言うまでもなく朔太郎の「氷島」序文中、周知の一節であるが、この痛烈な近代詩批判が、同時にその底に、筆者自身のがい挫折感を踏まえたものであることを見逃してはなるまい。「氷島」刊行後二年、「氷島の詩語について」（昭和十一年七月）なる一文中に、詩人は次のように記している。

「『氷島』の詩は、すべて漢文調の文章語で書いた。これを文章語で書いたといふことは、僕にとつて明白に「退却」であつた。なぜなら、僕は処女詩集『月に吠える』の出發からして、古典的文章語の詩に反抗し、口語自由詩の新しい創造と、既成詩への大胆な破壊を意表して来たのだから。今にして僕が文章語の詩を書くのは、自分の過去の歴史に対して、たしかに後方への退陣である。（中略）その巻頭の序文に於て、一切の芸術的意図を放

棄し、ただ心のままに書いたと断つたのも、つまりこの「退却」を、江湖の批判に詫びたのである」

「新しい日本語を発見しようとして、絶望的に悶え悩んだあげくの果、遂に古き日本語の文章語に帰つてしまつた僕は、詩人としての文化的使命を廢棄したやうなものであつた」

誰が近代詩人のなかで自らの歩みに即して、このような痛切な敗北と挫折の意識を、かくも真率に告白しえたであらうか。ここには近代詩の創成者としての藤村と同じ問題が繰返されている。

「よろしく新思想に適すべき新詩形を作るべし」とは、屢々評家の責めたまふところなれども、調は遂に七五と五七とを離るる能はず」とは、「若菜集」の詩篇に先立つこと半歳、明治二十八年十二月に記した「韻文に就て」中の一節である。然も彼はその詩作を閉じんとする時に當つて尚且、七五、五七の詞調を脱しえない苦しみを記し、五、七音基本律が、ついに「所謂大理石を裁断せしがごとき明晰なる韻律を成すに利あらざる」（「雅言と詩歌」明治三十四年四月）ことを嘆じている。この近代詩の創成者と確立者、藤村と朔太郎の二人詩人が直面した問題は、共に「新しい日本語の発見」「明晰なる韻律」への摸索であつた。

然し、朔太郎にあつてそのような挫折感の表示にも拘らず、否その故にといふべきであらうか、むしろ彼の晩年の志向は、口語自由詩の教文的解体、拡散的な韻律に対して、格調ある堅固な詩的韻律を、緊縮した韻律的なフォルムを求めつつ、蕪村、芭蕉の古典詩に深く傾斜していったことは、彼の「蕪村論」（「郷愁の詩人と蕪村」昭和十二年三月）「芭蕉論」（「芭蕉私見」同書所収）にみる処である。

「水島」序文に、すでにそのことは予示されている。

「芸術としての詩が、すべての歴史的発展の最後に於て、究極するところのイデアは、所詮ポエチイの最も単純なる原質的実体、即ち詩的情熱の素朴なる詠嘆に存するのである。(この意味に於て、著者は日本の和歌や俳句を、近代詩のイデアする、未来的形態だと考へて居る。)(傍泉筆者)

和歌や俳句が近代詩のイデアする未来的形態とは、ある評家が賢治の「雨ニモマケズ」を評した言葉を借りれば、「ふと書きおとした過失のようなもの」と言えるかもしれない。然し、このようなあやまちこそ、屢々理論を超えたにがい真実を含むものだ。

藤村と共に朔太郎の求めたものは、様式——「形式と内容との内的融合、その根本的不可分性を最もよく保証するもの」(ウエイドレ)としてのそれであり、近代詩がその発生以来の課題、失われた様式の恢復、あるいは獲得への痛切な自覚こそ、この詩人たちをつらぬく根源的な課題であった。藤村の詩作が、前述の二つの詩論に括弧づけられる如く、朔太郎の試みも、二つの詩論、あるいは詩観ともいふべきもの、即ち「詩の原理」と「水島」序によって枠づけられるとすることが出来る。彼の詩論の集約ともいふべき「詩の原理」(昭和三年十二月)に於て、彼は日本の近代文学で、いかに詩が不当に圧迫され、辱かしめられ、イデアを失っているかを指摘し、その末尾に次のように記している。

「けれども時がくる時、いつかは文壇にもイデアが生まれさすがに現実家なる日本人も、何かの夢を欲情する日が来るであろう。我々はその日を待たう。そしてこの新しい希望の故に、尙且

つ我々の未熟な詩を書いてゐるのだ。もしきうでなかつたら、今日のやうな国語による、西洋まがひの無理な自由詩など作らないで、芸術としてずつと遙かに完成されたる、伝統詩形の和歌や俳句を作るだらう。我々はだれも、今日の詩が芸術としての完成さで和歌俳句に及ばないことを知り切つてゐる。しかし我々の求めるものは、美の完成でなくして創造であり、そして実に「芸術」よりも「詩」なのである」

この言葉と和歌や俳句に近代詩の志向する未来的形態を見るといふ言葉とは、明らかに矛盾するかにみえる。この「詩の原理」から「水島」序文への屈折は何を意味するのか。啓蒙的な、改良派意識に発する「新体詩」発生以来の「西洋まがひ」の歩程の裡に、その歪みのなかに、自らの道を切り拓かんとする矛盾と葛藤を、そのドラマを、詩人は一身に性急に演じてみせたのではないか。然もこの課題は、ただに様式の問題のみでなく、更に根柢的には、その民族の、伝統の、土壌の問題にかかわるものである。即ち、前掲の「詩の原理」の結論に対して、その対極に、たとえば「水島」序文の、あの和歌、俳句云々の一節の代りに、次のような言葉を置くこともできる。

「今になつて、私が漸く始めて知つた一つの事は、私の過去に受けたすべての文学的教育が、根本的に皆ウソであつたといふことである。明治以来の日本の文壇が、私に教へた一切のことは、すべてに於て「西洋に追従せよ」といふことだつた。(中略)馬鹿正直にも私はすべてこれ等の指令を忠実に遵奉した。そしてしかも遵奉することによつて文壇から除外され、日本の文学から縁

の遠い世人人にされてしまった。現実してゐる日本の文学には、どこにもそんな舶来種のイズムは無かつた。すべては遺傳的な國粹精神で固まつてゐた。今になつてから、私は漸くそれを知つた。日本の風土氣候に合はないものが、日本に於て生育し得ないといふことを。(中略)彼等は私を欺いたのだ。或はまた、馬鹿正直にも私が彼等に騙されたのだ。私はそれが口惜しいのだ。」

この言葉は「絶望の逃走」(昭和十年十月)の「巻尾言」として記されていること、即ち「蕪村論」「芭蕉論」と同時期に記されたものであることを思えば、彼の詩觀の推移の背後に、このような伝統、風土、體質の問題のあることがわかるであらう。彼は芭蕉の一句、八この秋は何で年よる雲に鳥を評して次のように言う。

「こうした複雑で深遠な感情を、僅か十七文字で表現し得る文学は、世界にただ日本の俳句しかない。これを翻訳することも不可能だし、説明することも不可能である。ただ僕等の日本人が、日本文字で直接に読み、日本語の発音で朗吟し、日本の伝統で味覚する外に仕方がないのだ」(傍筆者)

彼の晩年の詩觀を領していたものが、前記エッセイ集巻尾の言葉と併せても、詩語のもつ伝統性、土着性の問題であることは瞭然とするであらう。

日本の文学史の過程の背後には、常にこの朔太郎の言う「僕等の日本人」という問題が横たわつてゐる。それが様々な変移を、回帰を生み出す。朔太郎の詩における素朴純一な原質への回帰の背後に、それがあつた如く、彼と同時期を生きた暮鳥の詩觀の推移にも、相照応して、それを見ることが出来る。ただ彼は認識者のな朔

太郎に対し、求道者的な詩人として、より生活的に、倫理的に、その道筋を示したにすぎない。たとえば「月に吠える」から「氷鳥」を経て、「蕪村論」「芭蕉論」への推移に対して、「聖三波玻璃」から「雲」への曲折を対峙させることができよう。「雲」の境地への帰着は、評家たちの言う如く、「その生命讚美が、胸の病氣によつてむだんに打砕かれた」(山壽)処に発するものか、あるいはまた、「教会のストイックな規定」に対する「文学のデカダンス」を通じての「生の意識の獲得」を媒介として、おのずからにみちびかれたものか(伊藤壺吉)、様々の要因があるとしても「僕らの日本人」の問題がその根柢にあると言える。暮鳥の帰着する処にはじまる重吉の詩は、その人生觀や思想に於て多くの差異を含みつつも、なお根柢に於て、「詩と人格との一致」と共に、「僕らの日本人」という原質に於て、深くつながる処がある。

先に引いた井上長雄氏の言葉——「信仰告白が」「日本の文学的言葉となつた」という、その日本のという辭句に評家自身の意識をさえ超えた、格別の深い意味があるとは、このことである。「日本の」とは、単に翻訳臭や西洋臭きを脱した、平易な、生きた言葉という如き意味のみであつてはなるまい。朔太郎が、「僕ら日本人」と言わず、「僕らの日本人」と言つた処に注目すべきであらう。重吉の詩の眞の面目は、単に純一無雜な信仰の告白であつたという点のみではなく、上記の如き近代詩の含む一要因を深く踏まえ、そこにおのずからに現前する土着、伝統の体感を示し立てゐる処にある。彼の詩の成敗も、限界もまた、ここにかかつてゐると言えよう。たとえば次の如き周知の一篇は、我々に何を語つてゐるのか。

△てんにいます／おんちちうえをよびて／おんちちうえさま／おんちちうえさまとなえまつる／いずるいきによび／入りきたるいきによびたてまつる／われはみなをよぶばかりのものにてあり、
或いはまた△もつたいなし、おんちちうえさまの称名は▽云々、
△現のわれにははてしない無明である▽などの詩句にみるもの——
前掲の評伝「八木重吉」の著者をして、敢て「一念称名」とさえ名づけしめているもの、その信仰的表白におのずからにじみ出るなものか。我々は、キリスト教詩とよばれる彼の詩の背後から、ある深い何ものかが、その貌をのぞかせていることに気づく。彼の精神の底部にあるものは、彼がその土壌として踏まえていたものは、何であつたのか、我々はその詩句の底に横たわるものを廻り起してゆくほかはない。

三

△なぜわたしは／民衆をうたわないか／わたしのおやじは百姓である／わたしは百姓のせがれである／白い手をしてかるがるしく／民衆をうたうことの冒瀆をつよくかんずる（後略）▽——これは重吉の詩の一節であるが、また別の詩に、△歌うなら美しく／うたうなら／哀切に　ほがらかに／だが／百姓の伴ということを忘れないように！▽とある。

東京府南多摩郡堺村の農家の次男に生まれ、後鎌倉師範、東京高等師範と進み、卒業後は英語教師となり、高師時代にキリスト教にふれ、また詩人としてはキーツを最も愛した彼ではあるが、この「百姓のせがれ」であるという意識は、生涯を深くつらぬき、彼の

八木重吉——その一側面

詩風や信仰生活にも深い影響を与えたとみることができるときは、△いやにすました外国のおんな／三十づらをさげて　くちをむつとむすんで／しりをふりたてて　元術をかつぱしてゆく（後略）▽と記し、また教会を評しては、△……いったい／「聖書」を新調のフロックコートでもつたいらしく／教壇に講ずるなんて／そんな／漫画がどこにあらうぞ／もしも　今　この今／エリアの火が／焰々と　降るならば／おそらくは／もつとも怖ろしい焰が／教会に集うておる／お召の淑女と／ぞろりとした紳士の頭上を下るだらう（後略）▽と記していることなどは、この百姓のせがれという意識と無縁ではあるまい。

彼のこのような教会批判については、高師時代の一時期、小石川福音教会（現在の基督教団小石川山教会）に通つた以外には、その後教会との関係はなく、むしろ高師時代の半ばより内村鑑三の著作に深く傾倒したことによつて、「イエスに直接してゆくはげしい要求が、通常の教会制度に重吉をおちつかせなかつたのであらう」（関説）という風に、鑑三による無教会主義の影響、また彼自身の一途な性格にもよるものとみることができ、やはりその根柢に上述したような意識が、つよくはたらいっていたことは見逃せまい。
先年、とみ子夫人（今は歌人吉野秀雄家に嫁しておられる）にかがった処によれば、彼は常に、五、六人でもよい、共に祈り語る人がほしい。教会とはフロックコートなど着かざつた人たちのものではない。貧しい人たちがゆくことをためらうようなものはいやだ。立派な教会などは不要なものだと、語っていたという。また詩については、その最初の詩集「秋の曠」が大正十四年八月に刊行さ

れたが、だれにでも読めるようにと主張して、七〇銭という当時としても低廉な頒価をつけたものだといふ。詩はだれにでも読める、やさしい言葉でひと言もむだのないようというのが、彼の願ひであったといふ。これらの信仰と詩作にふれた言葉の底にあるものは、まぎれもなく、百姓のせがれであることを忘れまいという意識から生まれた、庶民的体感ともいふべきものである。

△深い人生よりもっといい人生／それは個に徹した人生だ△と言ひ、△私みずからであること／それのみ絶対である△とうたった彼は、そのみずからの場所を、根ざすところを、掘りつづけた。そこから独自の詩が、告白が、そしておのずからに、その背後からある深いなにかがにじみ出ている。それを敢て伝統性と言ひ、土着性という前に、我々は今少し彼の詩そのものの語る処に目を向けねばなるまい。

重吉にとつて、そのふるさととは、農村での少年時代の想い出は、彼が常にそこへ還つてゆかざるを得なかつた場所、詩のなかで繰返しなつかしみ、歌わざるを得なかつた場所であると共に、また一面、敢てそれを拒み、闘わざるを得なかつた「古き世界」でもあった。彼の心の底には常に、この深い葛藤があつたと思ふ。

△心のくらい日に／ふるさとは祭のようにあかるんでおもわれ
る△

△ふるさとの川よ／ふるさとの川よ／よい音をたててながれてい
るだろう／（母上のしろい足をひたすこともあるだろう）△

これらの詩の傍に、たとえば次のような詩を置いてみるといい。

△にぎやかな／まちのさざめき／だんじりのときのこえ／かねた
いのひびき／これらみな／キリストのおしえにとおきゆえいきど
おろしくはあるが／またじぶんとすれば／これらをうれしき得ぬま
でに／少年の日にとおぎかつたのがかなしまれる△

また次のような詩――

△金がないのだから／ものをかおうというのではないが／歳暮の
まちのにぎやかでないところをさまよえば／ふみ切りばたに／だい
こんがたんとつまれている／すこしもころはゆるみはせぬが／こ
のだいこんのたくさんをみれば／しようじょうとふるさとのころ
がしみてくる△

何気なく読みすぐすこともできる詩だが、然したとせば、△すこ
しもころはゆるみはせぬが△という一句が、何故ここに挿入され
ているかを、立止まって考えてみる必要はあるう。△ふるさとのこ
ころ△とは、△少年の日△とは、彼のはげしい求道の世界にあつて
は、その背後に捨てざるべき何ものかであつたのであろう
か。恐らく問題は、さらにその奥深くにある。

△「女」というものは／ふしぎなものだ／いわしのすりみをつく
るとして／ごりごりいわしをすりばちでつぶしている／なむあみだぶ

つ／なむあみだぶつ（後略）▽と記し、また朝飯の時に、きまつてぐすんとはなをかむ老婆に、どうかそれをやめてくれ、△どうか平明であつてください／わたしは何かしら無気味なのです▽と言う彼が、自分の生れ出た農村の古びた生活に何を見、何をかんじていたかは、容易に読みとれるところだが、たとえば彼が△わたしは何かしら無気味なのです▽という時、それは彼が屢々言う△ぬらりとさみわるい▽△ぬらぬらとおぐらい▽世界に通ずるものである。△……ふとしたまがりかどへきたとき／そこになにかしら／ひとだまのように／ぬらりとさびしいものがふらついているのをかんずることがある▽——この△ぬらりとさびしいもの▽は、彼の心の底部に深くわだかまっていたものであり、ある時は、△じぶんが／どうしてもじぶんであつて／わたしのほかのものではないという／そのことがぬらりとさみわるい▽ものに思われ、またある時は、△これがいのちか／これがいのちか／ぬらぬらとおぐらいともしびのものとみる／おのれの生活、つまよひとりの児よ／このようにくれ、またあしたをむかえる／これだけがいのちのあじわいなのか▽とうたわざるを得なかつたものである。

△古い井戸をのぞきこんだら／わたしは／古いものになるらしかった▽——重吉にあつて、古きとは、このような無気味な、庶民的体感につながるものであつた。この△古い井戸▽は、彼自身の心の底深くあつたと、もはやつけ加える必要もあるまい。先にも述べた、あのキリスト教詩と呼ばれる彼の詩の背後から、時にふと、あの深い何ものが貌をのぞかせているとは、彼の裡なるこの土着的、伝統的体感に発するものにほかなるまい。ここの処を土台として考へてみるならば、後期の彼の信仰詩にみる、独自の発想、詞調も、またおのづからに背けるものがある。

△おんちち／うえさま／おんちち／うえさま／と　とのつるなの▽
△もつたいなし／おんちちうえととのうるばかりに、ちからなく
わざなきもの／たんたんとしていちじようのみちをみる▽

この二篇の間に、先に挙げた△てんにいますおんちちうえをよびて▽云々の詩があり、その詞書に「千九百二十五年　大正十四年二月十七日より　われはまことにひとつこのよみがえりなり」とあるのをみて、信仰的な昂ぶりの裡に、おのづからにこのような詞調がうまれ出ているのを見ることができ、更に次の詩なども併せみるならば、そこにはまさしく、「一念称名」あるいは「一念合掌」とも名づくべきなものかが、現前していることが窺われよう。

△手をあわすれば／洗われてゆく／ふしぎなるこの世かな／かた
じけなきばんのうの世かな▽

ここには「一念合掌」ともいふべきもののほかに、さらに八かた
じげなきばんのうの世かなVという一句にもみるごとき、もはやキ
リスト教信仰の表白という発想のみを以て律することのできぬもの
さえが、明らかに示されている。また口語的詞調のものを拾つてゆ
けば、八天というのは／あたまのうえの／みえる あれだ／神さま
が／おいでなさるならば あすこだ／ほかにはいないV。あるいは
八神様 あなたに会いたくなつたVという、ほんの一行の詩など一
その発想と言ひ、語法と言ひ、素朴な農村の、庶民の、敢て廻え
ば、一念念仏の発想につながるものであるとさえ言うことができま
う。

彼の詩における信仰の表白を、自力より他力への展開とみる、関
茂などの指摘もあるが、同時に単なる自力他力の範疇を以て律しき
れぬ一面を蔵していたことも、見逃してはなるまい。

八あまりに／ちきくならうちきくならうとしてもだめだ／いまは
神のごとくならうV(傍点筆者)

八もつたいなし／おんちちうえさまの称名は／にくしみにむかう
刃である／われひとりとなりて世界にみつるV(傍点筆者)

ここには、キリスト教的な信仰の告白という如き種からはみ出て
ゆく、心の昂ぶりがみられる。特に後の詩篇にみる如く、八もつた
いなしV云々の一念称名の他力的表白が、その背後に、自我遍満の
自立的志向をひきずっている——ここには、日本のすぐれて求道的

詩人たちの系譜にみる、ひとつの資質をまぎれもなく読みとること
ができよう。言わば真の他力に立つ対自でなく、即自的な求道の志
向であり、高村光太郎、さらには光太郎の最も深い系譜というべき
草野天平——彼は晩年、ひたむきな求道と詩作精進のため、比叡の
山中の一僧庵にこもり、二年近くの時をすごし、昭和二十七年春、
四十三才で病没している——、さらには一時期の富沢賢治など、近
代詩士のすぐれて求道的な詩人に共通する一面を確かに有していた
と言えよう。

キリスト者としての信仰と、詩人として名を求めんとする渴望
と、この両者の相剋は、彼の詩のなかに屢々あらわれて来るモチー
フであるが、それは八イエスを信じ／ひとりでに／イエスの信仰を
とおして出たことばを人に伝えたらいい／それが詩であらう／詩で
なかつたら人にみせない迄だVという処から、ついには八わが詩い
よいよ拙くあれ／キリストの栄 日毎に大きくあれVという一元の
世界に収斂されたかにも見える。この、詩も生活も、信仰の一元につ
らぬかれたかにも見える詩人の裡にある矛盾、純粹無難なキリスト教
信仰の表白といわれるものの背後にひきずっているなにものか、時
に彼自身の意識をさえ超えておのずからに現前する、根源のなにも
のかを敢て指摘してみたが、この作業はあながち無駄とは言えま
い。

屢々キリスト教会に於て、信仰の純一が説かれる時、その周囲を
とりまく世界、風土を、異教社会の語を以てよんでいるが、然し、
その八異教社会Vとは、まぎれもなくその人自身の、我々自身の根
柢に、底にあるものであることを、重吉の詩はふかくあかしますも

のである。キリスト教詩が、八木重吉という詩人を俟ってはじめて、その日本の詩語としての肉声をかちえたということ、それは無縁ではない。

彼の詩を純粹なキリスト教詩人という視点から、すべてを純なもの、矛盾なきものとして、読みとる必要はあるまい。敢て指摘した彼の矛盾も、むしろ純一にキリストの前を生きぬいたが故に、自己の矛盾を、昂ぶりを、かなしみを、ためらいなく、真率にうたいえたとみるべきであらう。

「私の詩」と題して、彼は次のように語っている。

△においも無く響もなく／冬の屋間の月のように／弱げでありながら奪うことは出来ぬ▽

この自負は正しい。一見淡々しくみえる彼の詩は、奪うことのできぬ、抜きとることのできぬ、土壌深く根ざしている。そこにおのずからに示現するものを、我々は十分に汲みとる必要がある。

このすぐれて求道的な詩人と、その求道的あるいは宗教的資質に於て、比較究明の興をそられる暮鳥、光太郎、賢治、草野天平等一連の詩人たちとの関連、また彼が最も傾倒した詩人キーツの影響、さらにはまた、内村鑑三の影響下にみる無教会的信仰の問題など、ふれるべき多くの問題が残されているが、これらはまた、他日を期して論じてみたいと思う。

付記 引用の重吉の詩は、すべて「定本八木重吉詩集」及び「花と空と祈り」（新資料・八木重吉詩稿）に拠り、従って両書の通り